

# 少年雑誌にみる〈対中感情〉の構造

## ——近代日本の感情史としての試み

横浜市立大学国際教養部准教授 金山泰志



はじめに「戦争を繰り返さない」  
ために、感情の歴史をたどる

「悲惨な戦争を二度と繰り返してはならない」。終戦の記憶を語り継ぐうえで、この言葉は欠かせない。ただ同時に私たちは、「なぜ戦争が起こったのか」を、政治や外交の出来事だけでなく、社会の内側からも問い直さなければならぬ。とりわけ近代日本の場合、国家の政策や軍事の動きに加えて、人びとが共有した「空気」——他国への好悪や優越感、苛立ち、恐れといった対外感情——が、戦争動員を支

える心理的基盤として働いた可能性がある。日中戦争期には中国への嫌悪・蔑視が、太平洋戦争期には対米敵愾心が前面に出た、という見取り図は、その入口である。

本報告は、近代日本の対中国感情がどのように形成され、共有され、持続したのかを、子ども向けメディアと教育という回路から考える試みである。扱う史料には、今日の視点から見て不快さを覚える表現が少なくない。だが、ここでの提示は当時の社会を単純に断罪するためではない。歴史学の史料として検証し、感情がどのように作

られ、どんな形で日常へ染み込み、いかなる条件で強まったり緩んだりしたのかを見極めるためである。

本報告で特に重視したいのは、対中感情が単なる「好き嫌い」にとどまらず、当時の国際規範意識——すなわち「文明／野蛮」という対置——によって「説明可能なもの」として提示され、しばしば道徳的に正当化されやすかった点である。日本を「文明国」と位置づけ、中国を「野蛮」「遅れ」「無秩序」として把握する枠組みは、感情（嫌悪・優越・苛立ち）を、あたかも文明人として当然の判断であるかのよ

うに見せうる。

結論を先取りすれば、近代日本の中国観には、(1) 同時代の中国(清国・中華民国)へのネガティブ感情と、(2) 古典世界の中国(孔子や関羽など)へのポジティブ感情が併存する「二重構造」がある。しかもその二重構造は、時代が変わっても消えず、形を変えながら残った。本報告では、日清戦争期(明治)、大正期、満洲事変〜日中戦争期(昭和戦前)という三つの局面をたどり、二重構造がどのようにに形成され、変奏され、残存したのかを確認したい。なお、本報告は、拙著『近代日本の対中感情』(中公新書、2025年)での検討に依拠しつつ、教育や国際規範意識などを踏まえて改めて考察を加えたものであることをあらかじめおことわりしておく。

## 1. なぜ「少年雑誌」なのか—感情をつくるメディア

本報告が主に焦点を当てるのは、明治・大正・昭和戦前期に広く読まれた「少年雑誌」である。少年雑誌は、娯

楽と教育の二重性をもち、小説・漫画・挿絵・写真によって読者の感情を喚起する。善悪二元論で「敵」を描くことで、「子どもの理解に合わせた」「わかりやすさ」を実現し、そのぶん感情の方向づけも強い。戦時には敵愾心や蔑視表現が顕著になり、平時でも風刺や笑いを通じて他者像を定着させていく。

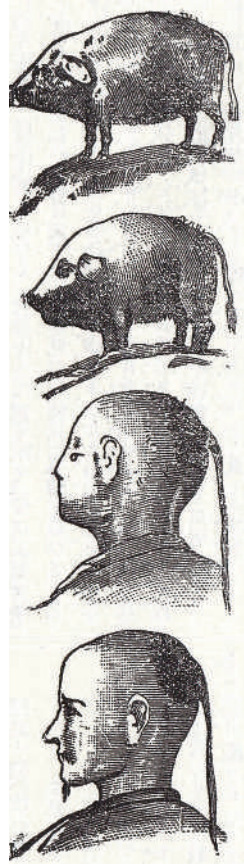
加えて、少年雑誌には投稿欄があり、読者が小話や感想を寄せ、編集部がそれを取り上げる。ここには、感情が一方通行で注入されるのではなく、受け手が参加しながら共有されていく仕組みがある。笑いの型、蔑称の使い方、苛立ちの言い回しが、誌面を介して「当たり前」になっていく。この点で少年雑誌は、同世代の読者が一定の感情規範を共有する「場」—感情の共同体—を形づくる装置として機能したといえる。

なお、こうした感情形成を支える骨格として重要なのが、「文明／野蛮」の図式である。近代世界では社会を文明の段階として序列化する見方が広く流通し、日本でも衛生観(清潔／不

潔)や秩序観(整然／無秩序)と結びつきながら、「文明国としての日本」という自己像が育まれた。コレラ流行などを背景に、公衆衛生や清潔が文明国の条件として意識されると、「不潔」は単なる生活習慣の違いではなく、文明度の低さの証拠として語られやすくなる。こうした枠組みが、少年雑誌の図像・言説、さらには学校教育の語りと結びつき、対中感情を道徳化し、日常へ根づかせた。

## 2. 明治・日清戦争期—敵愾心から嘲笑へ、そして「二重構造」の原型

明治20年代後半、日清戦争(1894〜95)は対中感情を急変させた時期である。この前後に『小国民』(1889年創刊)、『少年世界』(1895年創刊)など少年雑誌が次々に登場し、挿絵・口絵を重視しながら戦時下においては戦争関連記事を掲載した。少年雑誌は戦争を善悪二元論でわかりやすく描き、敵〓中国人像を単純化・感情化し、ときにエンタメ化して伝達



図① 『小国民』  
1895年5月1日号

する場となった。ここで強く働いた説明の枠組みが「日本Ⅱ文明／清国Ⅱ野蛮Ⅱ」である。

象徴的なのが、清国人の身体的特徴である弁髪をめぐる表象である。少年雑誌では弁髪が「豚尾」と呼ばれ、蔑視の記号として反復される(図①)。

弁髪という「見てすぐわかる違い」が嘲笑の対象として定着すると、相手の人格や多様性を覆い隠し、「中国人はこういうものだ」という類型化を助長する。

さらに戦時の過熱のなかで、中国人を「人」ではなく「家畜」として描く表現も現れる。『小国民』1894年7月15日号(図②)「馬乗ごっこ」では、中国人を馬扱いする構図が示される。蔑称として「チャンチャン坊」「豚尾」なども用いられ、敵愾心が人格を奪う表象へ接続していく。戦争は相手を殺傷しうる状況だが、それを心理的

に可能にするには、相手への共感を切断する回路が必要になる。「家畜化」は、その回路の可視化といえる。ここで「野蛮」とみなされた他者は、同情の対象ではなく、懲らさるべき対象として置かれる。

ただし感情の流れは単純な敵意一色ではない。戦争初期の激しい敵意が、日本軍の連戦連勝を背景に「嘲笑」へと移る局面がある。『少年世界』1895年4月1日号付録「本家本元 清朝二十卑怯」(図③)に見られる、跪いて許しを乞う中国人の凶像は、敵を

笑いの対象へ変換していく。嘲笑への派生は重要である。敵を恐れるのではなく侮めることは、戦争の加害性を軽くし、勝敗を予定調和に見せ、社会に「気持ちよさ」を供給する。さらに、嘲笑は憎悪より日常に入り込みやすい。投稿欄(「笑林」など)

を通じて小話として消費されれば、戦争の現実から切り離されつつ「見下しの感覚」だけが残りやすい。つまり戦争期の感情が、戦場の外の生活世界へ軽い形で浸透し、後の時代にも持続しうるのである。

一方で同時期、古典世界の中国人・中国偉人は肯定的に描かれる。孔子・関羽・張飛などが「忠烈」「豪傑」として紹介され、同時代の清国人像とは対照をなす。つまり、同時代の中国には蔑視と嘲笑、古典世界の中国には尊敬と憧憬という、二重構造の原型がこの時期に形づくられた。二つの中国像は衝突して消し合うのではなく、役割分担するように併存したのである。



図② 『小国民』1894年7月15日号



図③ 『少年世界』1895年4月1日号

さらに日清戦争期には、人気作家・巖谷小波らによる戦争寓話も誌面に載り、勸善懲悪の形式で「文明国の正義」と「野蛮な敵」という対比が反復された。寓話は作り話でありながら、善悪の判定を子どもに学習させる力が強い。そのため「文明対野蛮」という枠組みは、ニュースとしてではなく物語として、より深く身体化されうる。

### 3. 日清戦争下の小学校教育―教科書の抑制と、現場の過熱

ここからは、少年雑誌とは別の回路、小学校教育という場を確認した

い。対中感情が社会に広がる過程では、娯楽メディアだけでなく、学校という制度空間が大きな役割を担う。言い換えれば、少年雑誌以上に「日常の中で感情が根づく」仕組みを示しているともいえよう。

(1) 教科書―否定的記述はあっても、露骨な侮蔑は抑制された

明治期の小学校教科書には、中国の風俗・環境を否定的に描く記述は見られる(例:「汚穢ナル所多シ」「氣風尊大)。しかし少年雑誌のような露骨な蔑視表現は、地理・国語・歴史・修身の教材にも見られない。日清戦争期に出版された『尋常小学読書教本』(1894年)には「征清軍歌」など戦争教材が多いものの、激しい中国否定描写はない。教科書は「公的な文章」であり、露骨な悪罵は文明国としての体裁にも反する。日清戦争が「文明対野蛮の戦い」として語られた以上、教科書の言葉づかいもまた文明国の言葉である必要があった。ただし重要なのは、抑制されて

いるのは語の激しさであって、枠組み(文明/野蛮)の対置が消えているわけではない点である。否定的形容(不潔・尊大など)は、文明国の作法で整えられた形として残りうる。教科書は表現を抑えつつも、評価の方向性そのものを温存し、子どもの世界観の前提を形づくる役割を果たしていたといえる。

(2) しかし学校現場では―蔑称が横行し、戦争談が授業を満たす

ところが学校現場では、戦争熱が容易に過熱する。中勘助の自伝的回想『銀の匙』によれば、日清戦争中の小学校で児童も教員も「ちゃんちゃん坊主」(清国人への蔑称)を用い、先生までが繰り返すほど日常を覆っていたという。ここには教科書から見えない侮蔑的言語の広がりがある。教科書が抑制的であればあるほど、むしろ教室の口語で発散される部分が生まれたとも考えられる。

『教育時論』1894年9月25日号には、修身科の時間が軍の話で満たされ、「児童の神経を刺激する」日清戦

争談が語られたとの報告もある。修身科は本来、日常の徳目を説く科目だが、戦時には容易に「国家への忠誠」や「敵への憤り」へ接続される。そこでは教科書本文よりも、教師の語り、教室の空気、子ども同士の言葉が大きく作用する。

さらに『千葉教育雑誌』（1895年2月18日号）・『長崎県教育雑誌』（1895年3月25日号）の「日清事件ヲ小学生徒ニ講話スルニ付注意スベキ要條」では、「清兵ノ怯弱ヲ説キ児童ヲシテ驕傲ナラシムマジキコト」「敵国ニ対シテ誹謗嘲弄ノ語ヲ用ザル様示諭スベキコト」などが述べられる。これは裏返せば、現場で実際に「清兵は弱い」「だから日本は偉い」といった優越の語りや誹謗嘲弄が出回っていたことを示唆する。注意喚起は、問題が起きていない場所には出ない。そして戦争勃発後の状況では、敵愾心の宣揚それ自体が「急務」と見なされやすかった。敵を憎む心が十分に形成されなければ、戦争を「正しいもの」として維持することは難しい。そ

のため教育者には、子どもに敵愾心を植え付けることが半ば使命化され、蔑称の使用や嘲笑が「愛国的態度」の証しとして容認されやすい空気が生まれた。教室は国家の統制が浸透する場所であると同時に、感情が加速しやすい場所でもあったといえよう。

### (3) 「文明対野蛮」図式と、教育／娯楽の差

この過熱を支えたのが、日清戦争を正当化する大義名分としての「文明対野蛮」図式である。相手を「野蛮」と置くことで、侮蔑は単なる悪口ではなく「文明人として当然の評価」に見え、攻撃や制裁は「正義の行使」として理解されうる。ここで感情は道徳化され、教育可能なものとして扱われる。

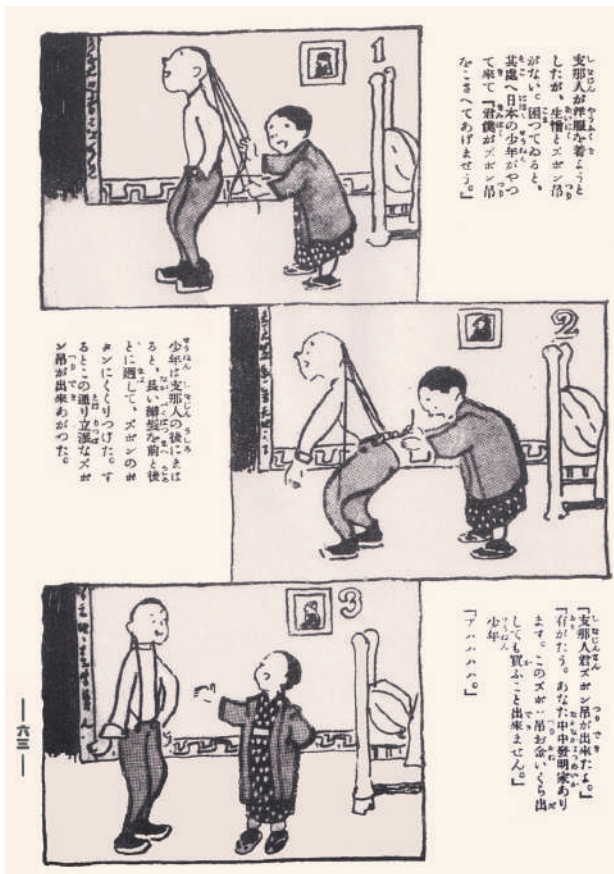
しかもこの図式は学校教育と相性がよい。修身科が扱う善悪二元論と接続しやすく、児童にとって理解しやすい二分法だからである。その結果、教科書本文は抑制的でも、教室の口語や講話の場で、蔑称や嘲笑が正しい感情として流通しやすくなることが考えられる。

また、教育／娯楽の差も重要である。教育は日常の規律であるため、そこで組み込まれた感情規範は深く残りやすい。一方、教育の場では行き過ぎた蔑視への抑制も働くが、娯楽メディアはその抑制をいとも簡単に取り払い、さらに過激化させる。日清戦争期は、感情が複数の回路を通じて社会へ染み込んでいった時期だったといえる。

そしてこの「文明／野蛮」の枠組みは、日清戦争期に成立して終わるのではなく、のちの昭和期の日中戦争に至るまで語彙を変えつつ反復される。日清戦争で徹底された勸善懲悪（日本＝正義／清国＝悪）の見取り図は、後に「不法」「無礼」「小癩」といった語をまといながら再生産され、敵意や侮りをわかりやすく正当化する装置として機能し続けた。

### (4) 古典世界の中国偉人は切り分けられた

日清戦争の否定観は古典世界にまで及ばなかった。古典世界の中国偉人は人格涵養の模範として教材化され続ける。『大日本教育会雑誌』1895年



図④ 『日本少年』1915年3月1日号

ここで象徴的なのが、冒険・探偵小説や挿絵における中国人像である。物語の悪役として中国人が配置されると、読者はそれを娯

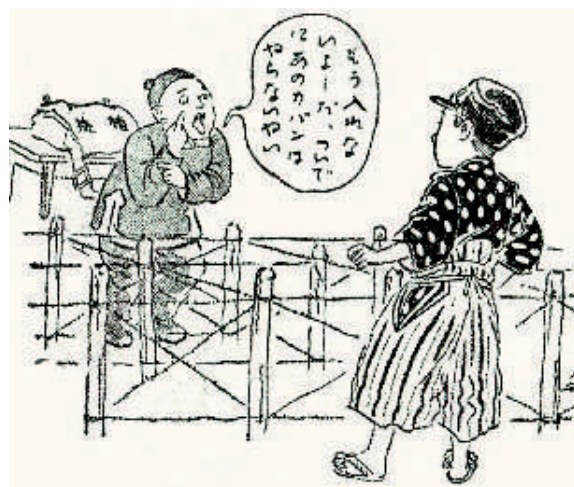
楽として受け取る一方で、「中国人は怪しい」「中国人は悪者」という類型を自然に学習していく。さらに、笑いの装置としての中国人像も機能する(図④)。中国人の言動を滑稽化し、からの対象にすることは、敵愾心ほど激しくはないが、見下しを日常化する。また読者投稿欄でも、「無くてもよいもの」↓「支那の中立宣言」、「小癩なもの」↓「支那人の言行」「支那の抗議」といった投稿が紹介され、苛立ちの言葉が共有されていたことが示唆される。戦争がないからこそ、憎悪の高熱ではなく、「うっとうしい」「生意気だ」という低温の苛立ちが続き、それが笑いや風刺と結びついて定着していく。

大正期は、明治の日清戦争期とは異なり、中国と直接の交戦のない時代である。だが辛亥革命(1911)〜12

年)や第一次世界大戦を背景に、中国への関心は持続した。この時期の主要史料として『日本少年』(実業之日本社、1906年創刊)がある。挿絵・写真・投稿欄など多彩な誌面をもち、ビジュアル表現を強めながら読者感情を喚起した。

大正期の特徴は、①中国人=悪人・滑稽の対象、②「日中親善」的言説、③古典中国への尊敬の継続、という三傾向に整理できる。つまり戦争がなくても、ネガティブ感情は形を変えて残り続けた。

#### 4. 大正期―「戦争なき時代」に続く苛立ちと、表面的な「親善」



図⑤ 『少年倶楽部』 1931年12月号

正期は「交戦がない」感情が中立化する」わけではない。敵愾心が沈むと、代わって苛立ちや嘲笑が日常へ浸透し、他者像を固定していくのである。

**5. 昭和戦前期—満洲事変から日中戦争へ—敵像の反復と、統制による切り替え**

昭和戦前期は、1931年の満洲事変から1937年の日中戦争へと連なる時代であり、日本の国際的孤立のなかで「中国＝敵」意識が増幅した。少年雑誌の中心は『少年倶楽部』（現・講談社）で、挿絵・写真・漫画などビ

ジュアル重視によって感情訴求が強化された。

この時期の時事解説は、親子対話・Q & A形式で「わかりやすく」噛み砕く型をとる。満洲事変の説明では、中国が

「意地悪」「乱暴」「約束を破る」といった感情語で語られ、図解も用いられた（図⑤）。日中戦争でも写真＋解説のパッケージが展開され、開戦当初には「中国は弱いので短期決戦で終わる」という認識が流布する。ここでは敵像の悪人化（道徳的に悪い）と弱体化（軍事的に弱い）が同時に進み、嘲笑と侮りが強まる。ここでも「文明／野蛮」図式は、中国側の抵抗や混乱を「無秩序」として描き、日本側の行為を「秩序回復」「指導」「教化」として



図⑥ 『少年倶楽部』 1935年7月号

語り直す働きを持った。

しかしここで注目すべきは、1938年10月の内務省「児童読物改善ニ関スル指示要綱」による統制である。戦争美談の過剰化・戯画化を抑制し、蔑称などを問題視した結果、露骨な侮辱は沈静化し、「日中親善」記事が増加した。ここで起きるのは、感情の「消滅」というより、表現の「切り替え」である。対外感情が国家運営にとって有用な形に整えられていくのである。ただし統制が入っても、娯楽読物の

中で敵像が反復される構図自体は残る。冒険物語や探偵もの、漫画では、敵が中国兵や中国人として配置され、ネガティブな描写が繰り返される。これらは現実の中国社会を説明するものではなく、物語の「型」として自走する。型は便利で、読者に「わかりやすさ」を与えるが、そのわかりやすさは偏見の温床にもなる。

そしてここでも古典世界の中国は消えない。雑誌は徳育を補完する編集方針を掲げ、韓信の故事（忍耐・立志）や故事成語の解説を挿絵付きで載せる（図⑥）。

さらには戦時の「正義」の語りに孔孟が動員され、日中戦争を「孔孟の昔の立派な支那」に戻すための戦いと位置づける論法すら現れる。古典への敬意は、単なる文化的憧憬として残るだけでなく、戦争正当化の論理に組み込まれうるのである。

## むすび——「同時代への蔑視／古典への尊敬」は、なぜ持続したのか

以上の検討から、少年雑誌などに表

れた近代日本の対中感情は、(1) 同時代の中国へのネガティブ感情と、(2) 古典世界の中国へのポジティブ感情という二重構造として整理できる。中国人は、娯楽と教育の両コンテンツとして消費され、戦時には敵愾心を煽り、平時にも物語の悪役や嘲笑対象として位置づけられた。日清戦争で徹底された勸善懲悪（日本Ⅱ正義／清国Ⅱ悪）の構図は、「文明／野蛮」図式と結びつき、敵意や侮りを「わかりやすく」正当化する装置として長く機能していた。

この構図は、終戦で自動的に消えるものではない。敵愾心は嘲笑や嫌悪へ形を変えて残存し、呼称変更（支那→中国）といった施策は一つの対応になりうるが、それだけでは根治策にならない。感情が歴史的に形成される以上、感情の歴史を知ることそのものが、冷静な関係構築の基盤となる。

国際善隣協会の掲げる「善隣」は、相互理解と信頼の蓄積を意味するだろう。そのためには、政治外交の表層だけでなく、社会の深部で共有されてき

た感情の回路を点検し、何が笑いとして流通し、何が教育の名のもとに語られ、どのように他者像が固定されてきたのかを見つめ直す必要がある。本報告で扱った少年雑誌と小学校教育の史料は、そのための「鏡」である。鏡に映るのは過去の他者像であると同時に、私たちが自身の感情のあり方でもある。（2026年3月27日・公開講演会）

### 筆者略歴（かなやま・やすゆき）

1984年、神奈川県生まれ。横浜市立大学国際文化学部卒業、日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士後期課程修了。博士（文学）。現在、横浜市立大学国際教養学部准教授。主要著作に『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房出版、2014年）、『近代日本の対中国感情』（中公新書、2025年）、『近代日本の中国料理受容と対中感情』（『日本史研究』719号、2022年7月）など。